



能登半島水害支援行動 に参加して



崩壊したままの家も

元日の能登半島地震で甚大な被害が出た石川県の奥能登地域を、9月21日から記録的な大雨が襲い、大量の土砂や大木が街に流れ込み、大きな被害が発生しました。

全日本民医連からの緊急支援要請に添えて、みみはらグループから以下のメンバーが支援に駆けつけました。9月26日に阪口書記長（労働組合）、28日に寺門さん（総合病院 理学療法士）、10月10日に河原林病院長（総合病院）、11日に吉本（総合病院）です。

金沢市内から輪島診療所へは車で向かいました。奥能登地域に近づくにつれ、震災の爪痕が残っており、自動車専用道路ですら七尾市あたりからうねりが激しく、崩落やひび割れが復旧されていませんでした。輪島市内ではあちらこちらで崩壊した家やがれきが手つかずで放置されています。震災後の大火災で全焼した輪島朝市は今も焼け野原状態です。震災から9カ月経過したにも関わらず、震災直後のような状態でした。

3月の北陸新幹線の金沢―敦賀間の開通で、金沢駅周辺は観光に力を入れていく様子が見受けられます。しかし、それが復興にはつながっていません。国政も地方自治でも地域住民（国民）の生活を大切にす政治への転換が必要と強く感じる支援となりました。

能登半島水害支援を終えて

耳原総合病院 病院長

河原林 正敏

元日の能登半島地震に追い討ちをかけるように起こった9月の能登半島豪雨災害での全日本民医連からの緊急行動支援要請に応え、10月10日の支援に参加してきました。

私は能登に長く暮らし、いたので、震災の支援に入らなかったもどかしさがずっとあり、今回の豪雨で背中を強く押されたというのが本心です。

この日、県連や職種を超えて集まった28人が4チームに分かれて現場に入りしました。輪島に向かう道中では、崩壊した道路や倒壊した住宅など、いまだ震災の爪痕がそこかしこに残っていました。豪雨で新たに崩れ流された跡と思われる光景も所々見られました。2



家財を運び出し、

チームが合同で派遣された先では、友の会会員さんのお宅を中心に住戸3軒の側溝が土砂、泥、木で埋まり、裏山からの水路の水が道路に溢れ出していました。途中からもう1チームが合流して総勢22人の力で土砂がみるみるうちに除去され、民医連集団の団結力、とりわけ若い世代のパワーと集中力を強く感じることができました。まだまだ道半ばですが一日も早い災害復興を祈ります。

耳原総合病院 事務長

吉本 和人

泥だしの全国支援の最終日で、全国から約30人が支援に駆けつけました。私は6人のチームで土砂が流れ込んだ友の会会員さん宅のサンルームから泥を出す作業をしました。すぐ裏に山があり、そこから大量の土砂と大木が家を襲っていました。

住人の老夫婦はたまたま金沢市内に出かけており、難を逃れました。室内は泥に浸かった家財であふれ、手が付けられない状態でした。家財を運び出し、

泥を吐き出して、何とか白い床が見える状態にまでなりました。サンルームまでの道を確保するため、ぬかるんだ泥を除け、再び流れてこないように土嚢で堰を作りしました。6人が力を合わせることで思った以上に作業が進み、全国の民医連の仲間の力を実感しました。

ただ、すぐそこまで押し寄せた土砂と大木は人の力ではどうしようもなく、再び強い雨が降ると危険な状態は変わりありません。行政の力がなくと住める状態に復旧できません。奥能登の復興には県や国家の事業として最優先で位置付けることが必要です。

リハビリテーション科
寺門 直輝

東日本大震災での被災をきっかけにいつか被災地支援に役立ちたいと思っていました。

最初に水害と聞いた時、一道路の木々を運ぶ程度に想像しかできていなかったこと、被災地支援は初であることもあわせて心構えもなく、持ち物も前日用意で臨みました。

金沢市から輪島市までは「のと里山海道」とい



う高速道路があり、本来車で1時間半程度の距離ですが、元日に起こった能登半島地震の影響で道路は陥没、まるでジェットコースターのような道でした。酔い止めを飲みながら2時間半かけて現地へ移動しました。

現地は想像を絶する状況で、家の中には膝下の高さまでヘドロが押し寄せ、使える家財はほとんどありません。水を吸った畳は大人3人がかり、カーペットは5人がかりで運搬。立地の影響で重機は使えず、全ての作業を人力で行いました。大人5人、3日間を費やし、やっとガレージ内のヘドロ出しが完了。今後は家財の運び出し、処分場までの運搬、床下のヘドロ出しがあります。ここまで完了しても業者による解体作業へ移るには多くの課題が残る、復興までの人手は全く足りていないと感じました。